

697

31カ
年

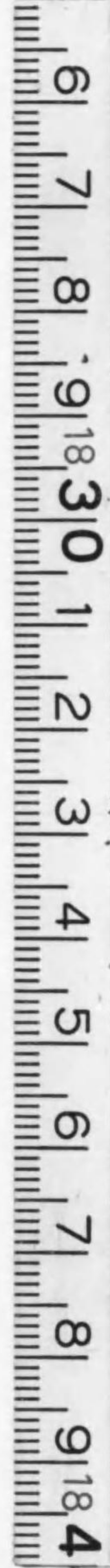
日ソ開戦か

特248

817

ソ連邦の対日工作を見よ！
云低迷するソ満國境！

10 せん



始



697

ロソ関戦か

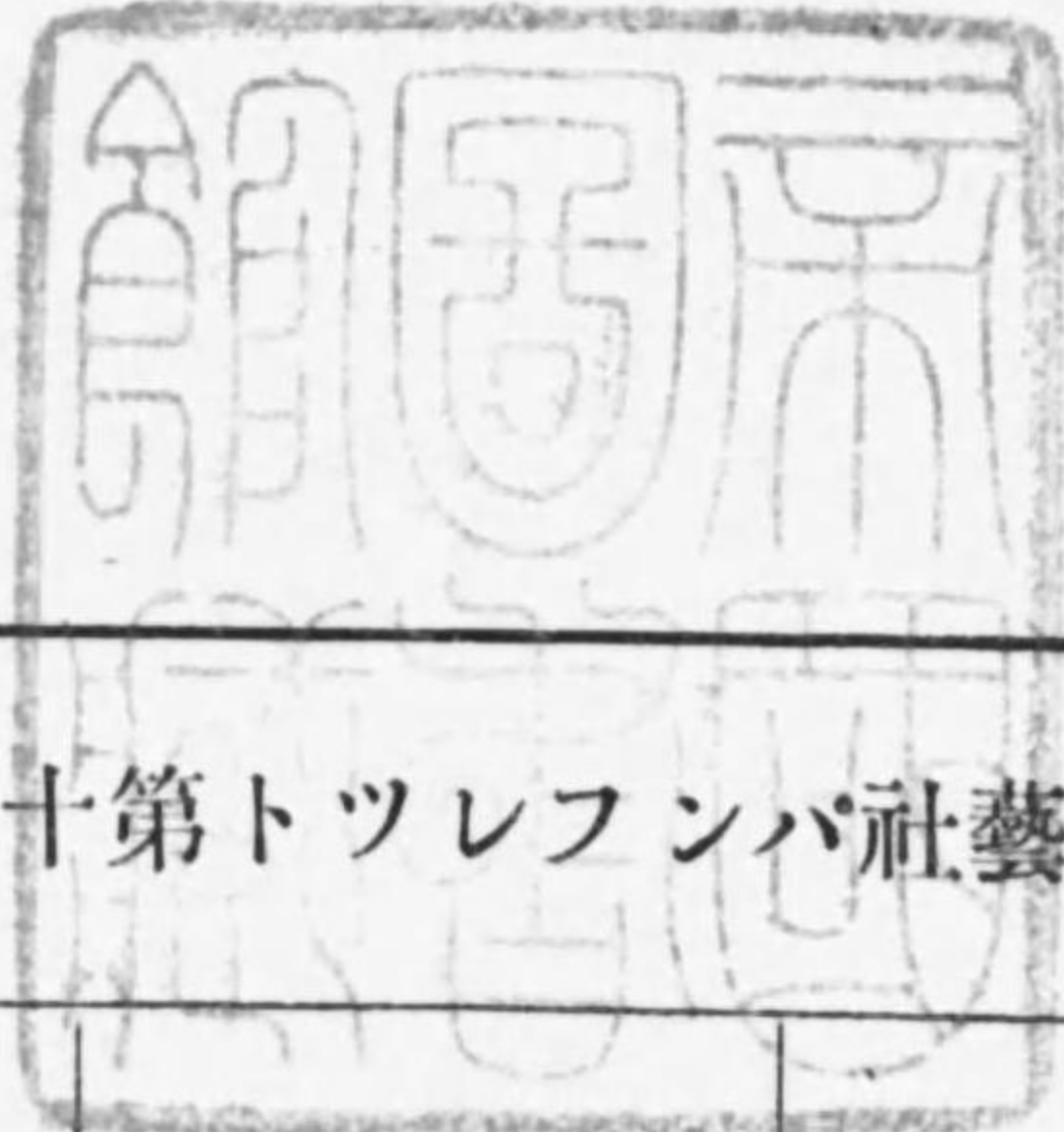
ソ聯邦の対日工作を見よ！

松波治郎著

農藝

10 ㊦

特 248
817



農藝社ハフツト第十四號

松波治郎著

日ソ開戦か？

東京農藝社發行



日ソ開戦か？

— 目 次 —

ソビエツト聯邦の國際聯盟加入問題	三
ロシアの豹變振り	六
國際聯盟と正面衝突の禍根	九
ソビエツト聯邦の外交工作	三
佛露の提携	一五
露獨關係	一八
ロシア・英國關係	三

ポーランドとロシア 二四

米露關係 二七

ソビエツト東漸と極東政策 三五

シベリア輸送力増加 三八

革命後の十七年 四〇

北鐵讓渡交渉の経緯 四四

日蘇諸懸案解決の鍵 四六

北洋漁業問題と暫定協定 四九

停顿せる日蘇漁業交渉 五一

日露戦争か 五三

日ソ開戦か？

松波治郎著

ソビエツト聯邦の國際聯盟加入問題

國際聯盟第十五總會に際會して、一般の最も關心を率いたものは、ソビエツト聯邦と國際聯盟の成行如何であつた。實際ソビエツト聯邦の國際聯盟加入は、如何に世界各國の、外交工作が、敏感で變北するのが常であるとは云へ、歐洲政局の一大珍現象である。

何故かと云へば、聯盟加入國は悉く、資本主義國であり、ソビエツト聯邦は云ふ迄もなく之を排撃する共產主義國であつて、根本的に思想上、相容れない。それ故に、スイス、ポーランド、オランダ、オーストリア等の諸國は、他の自國の外交政策上の立場もあると云ふ原因も手傳つて

はゐるが、概ね反對の意嚮を持つて居た。殊にポーランドはソビエト聯邦が聯盟の加入によつて、ソ佛ソ英關係が益々好轉すると云ふことは、頗る好ましからぬ事ではあり、その上、ソビエト聯邦が、國際聯盟に常任理事國となつて、ポーランドが理事國になれないと云ふやうな事があつたならば、益々自國の立場が、不利に陥るのである。ソビエト聯邦對、佛英の對立に依つて、このロシアを牽制して置くことは、中間に位置するポーランドの希望する處であるからして、殊に、強硬な反對を以つて居たのである。一方、ソビエト聯邦側の、國際聯盟に對する、從來の態度は如何であつたか、最初から國際聯盟に關係しない大國は、實に米國とソビエト聯邦のみであつた。

しかも、彼ソビエト聯邦は國際聯盟を目して、英佛等の、資本主義國が、弱小國を壓迫支配するを目的とする機關であると同時に、一方では、反ソビエトプロツクを構成せんとする機關であると、口を極めて酷評したものである。たゞ國際聯盟主催の軍縮豫備會議乃至經濟會議に代表を送つて、軍縮會議では軍備半減とか全廢とか、云ふやうな突飛な意見を提出して、滿場

をあつと云はせたやうなエピソードが残つてゐるけれども、それは聯盟に協力する考へで參加したのでは全然なく、聯盟の假面を曝露して自國政府の平和主義を宣傳する目的に依つたのに過ぎなかつた。

要するに過去を通じて、ソビエト聯邦の國際聯盟に對する態度は、絶對的排撃であつて、しかもこれを以つてコンミンテルン乃至各國共產黨の非常な闘争對象の一として來たことも否むべからざる事實である。

そのソビエト聯邦が何故に、爾然、掌をくつ返す如くに、俄かに態度を變へて、國際聯盟加入を希望するに到つたか又、聯盟側、就中、英佛伊の大國は何故に反對者があるにも係らず、弱小國を壓迫懲慝して加入せしむるやうな態度に出たか、これは今や滿洲國境に暗電低迷し、しばし歐米では、日ソ開戦不可避説さへ稱へて居る時に、我等國民は十二分に研討する必要がある。

ロシアの豹變振り

思ふにソビエツト聯邦の國際聯盟加入を希望するやうになつた遠因近因は幾多あるけれど、直接の原因は、ソ佛國交の好轉、日獨の聯盟脫退並びに日獨兩國に對する恐怖が大なる原因である。ソビエツト聯邦國內事情は、漸次資本主義が、敗退すると云ふ事の噂もあるけれども、それは彎曲された觀側に過ぎない。ソビエツト聯邦の希望は世界赤化の一階梯として、一日も早く社會主義建設の事業を完成するにあるのである。これには戰爭は絕對禁物である。これが爲めには國際聯盟加入が幾分でも其の希望を達するに利する處があるならば、加入してもかまはないと云ふ希望を多分に持つて來た。しかも新興ドイツの壓迫と、滿洲帝國の發展が加はつては愈々此の觀念を濃厚ならしめたのである。即ち、換言すれば、ロシアの聯盟加入は極東方策及び對獨政策に既往の孤立政策を放棄し、西方國境方面の安全保障を期するのである。

更らに、聯盟側から見れば、日獨の脫退は、實に、深刻なる痛手であつた。その後の、過程はたゞ、衰亡の一路であつた。即ち日本は聯盟を脫退して、殆んど世界各國から包圍攻撃の窮地に陥つたけれども、國運いやが上にも隆んで、聯盟側の一部で、脅威した經濟封鎖處の騒ぎではなく、この廉價にして優秀なる生産品は、世界市場に進出して、列國を驚畏せしめて居る。一方獨逸は殆んど孤立の位置に立ち乍ら敢然として復興する更生の雄叫びを擧げつゝ、臥薪嘗膽、歐米自由主義國の期待を裏切つて、先づヒットラー政權の中央集權主義ナチス化を實現した。歐米の獨逸に對する憂愁は、今や一變して恐怖となつた。これでは國際聯盟の威權も何もあつたものではない。

對獨政策、極東工作の爲めに惱みつゝあるロシアを抱き込んで、國際聯盟に加入せしめることは、國際聯盟に一脈の生氣を與へ、其の貫祿を重からしむる方策であると思ひ込んで居るのである。しかし、前述の如く、ソビエツト聯邦の聯盟加入の原因の一つは、佛ソの過去二ヶ年に涉る親交であり、しかも、その佛國が、積極的に働きかけたからである。

蓋し反獨歐米諸國中、ベルサイユ平和條約によつて、ドイツの手をもぎ、足をもぎ、最早ドイ

ツの再び立つ能はざるものとして、最も安堵の胸を撫で下ろしたものは佛國であつた。又、ナチス政權の隆々たる治政下に、最も脅威を感じて居るものもフランスである。

彼の希ふ事は、たゞドイツの滅亡である、それには、小異を捨て、大同に走り、ソビエツト聯邦を聯盟に加入せしめて、ドイツを包圍攻撃せんと考へるには當然過ぎる程當然である。

五月二十八日のソビエツト聯邦政府機關紙イズ、ベスチャ紙は、聯盟加入に就て、これはフランスが、聯盟に於て、平和の爲めソビエツト聯邦と、提携努力せんとする所爲であつて、如何にフランスがソビエツト聯邦に接近して居るかを示すものであると云つてゐる。

抑々、ソビエツト聯邦としては、大いに國際聯盟加入問題を重要視する。然るにソビエツト聯邦政府の加入には聯盟國間に反對者もある様であつて、現に、ポーランドの如く正にそれであるが、吾人はポーランドが歐洲平和の爲め盡力して居る限り、ソビエツト聯邦の加入が決してソ波兩國に利害を衝突する事なしと信ずる。又、今日、ソビエツト聯邦は、如何なる方面より、危機が迫つても、その國境を防衛する力を有するけれども、然し之を以て世界平和及び安全を増さん

が爲めの努力を不必要と認むべきではない。ソビエツト聯邦としては國力強大となればなる程、戦争の防止に盡力する各國と協調する必要があると云つて居る事は、ソビエツト佛國間の消息を物語るものであらう。又、利窟はつけやうである、嘗つてはレーニンは無産者に、對抗する世界種族の聯合と罵り、チチエーリンは資本主義國家國民を代表する國際取引所であると罵つた、當時を追想したならば、厚顔しいソビエツト聯邦も流石に、坦然たらざるを得ないであらう。

國際聯盟と正面衝突の禍根

結局は必要の前に低頭したのである。實際ソビエツト聯邦は國際聯盟に對して、反感を持つて居たけれども、事實今日迄、國際聯盟と全然關係がなかつた譯ではないのである。

たとへば、衛生問題、人道問題に就いては大正十一年頃から、ロシヤも聯盟に關係を持ち始めた。即ち大正十一年三月ワルソーに開催された國際聯盟主催の國際衛生會議にはロシヤ代表二名が出席して、その後も同じ協力が續けられ、大正十二年一月ゼネバの衛生會議、同十四年二月バ

リーに於ける聯盟主催の國內通航噸算統一會議と云ふやうな聯盟主催の技術的會議に於ては、逐次接觸方面が、開がつて來た、處が、大正十四、五年以後になると、歩一步政治的方面にも聯盟と協力しかけて來たのである。最初西歐大國を敵視したるロシアは、眼をアジアに於ける被壓迫民族に注ぎ、アフガニスタン、ギリシヤ、支那との提携を企て、一方にありては戰敗國ドイツ及びトルコの結盟を計つて、西歐諸國に對抗を試みたのであつたが、アジア政策は遂に意の如く運ばず、支那の如きは遂に國交斷絶とまでに進んだのに、一方、英佛伊は、大正十三年以後、ロシアを承認し、その關係は、常態に復し、しかも大正十一年ラツパロ條約により、ソビエツト聯邦と相誓つたドイツが大正十五年十月ロカルノ條約に於いて、西歐諸國と握手し、翌年聯盟に加入するに到つて、孤立ロシアはどうしても、動き出さなければならなかつたのであつた。

其後最近の狀勢は前述の如くである、九月四日の電報によれば、ソビエツト聯邦側は加入申込をなすに當つて、その前に、たとへば委任統治制度の廢止、人種平等宣言等數種の條件が國際聯盟總會で可決される事を要求したのであつたが、今回人種問題に對して將來に、紛争は國際共濟

裁判所の判決に従ふ事、たゞし、過去に端を發せる紛争に關しては自由を留保することの條件一項だけを留保し、他の條件は一切撤回することになつたと傳へられ、如何にソビエツト聯邦は、讓歩して聯盟加入に焦慮して居るか、覗はれる。

その後、英佛伊の積極的行動によつて、その加入の見込み濃厚となつたと觀測された事が、遂に九月十日の聯盟總會の理事會は、多數決を以て、これを可決し、ソビエツト聯邦の聯盟加入は愈々實現される事となつた。これに依つて將來如何なる機運を醸成するかについては種々觀測されて居るが、若し聯盟が、これによつて没落過程にある聯盟を強化し、よく平和保障の機關たるの實を擧げ得るに到るだらうと思つたら、とんだ認識不足である。世界到る處に網の張り渡されてゐるソビエツト聯邦の反宗教闘争運動や、コンミンテルンの活動に就いては、如何に制裁を加へるのか、これは必ずや近き將來に於て、正面衝突を招集する大なる過根である。更に、ソビエツト聯邦に就て考ふれば、今や資本主義國の左翼労働者は最近のコンミンテルンを目して、ソビエツト聯邦王國の擁護機關に過ぎずとも考へつゝある折柄、嘗つては匪賊と罵倒せられた聯盟に自

ら進んで加盟したことは、コンミンテルン乃至ソビエツト聯邦に對する、世界左翼労働者に信頼を愈々薄からしむる所因であらう。さもあらばあれ、ソビエツト聯邦の提唱する東歐ロカルの條約問題の成否は、どうあらうとも、兎に角、その國際聯盟加入は、ソビエツト聯邦をして、歐洲方面に、愈々安定を得させしめ、極東政策に愈々力を注ぐの餘力を得せしめたことは疑ひもない、吾人の關心する事は、たゞ此の一點である。

ソビエツト聯邦の外交工作

しかも此の國際聯盟加入後のソビエツトは、聯盟の平和機構との間に重大な問題を惹起させ、その妥協解決の發見が加入後劈頭の、重大問題とされるに到つた。

それは、加入後のソビエツト聯邦は當然、國際労働機關に加入すべきものと認められて居た處、ソビエツトは聯盟には加入したが、右労働機關の如き資本主義擁護を根柢とした社會組織の機關に加入する事は、他の諸國と全然異なる原則に基づくソビエツト國內問題に對し、他の資本主義諸

國の干渉を誘導する虞れがあり、このやうなことは社會主義ソビエトの到底容認することが出來ない問題であるので、労働機關加入問題は俄に決定出來ない處であるとの見解を示し、早急に労働機關への加入を言明せず、目下ゼネバに在るリドウイノフ外務人民委員長が、モスクワに歸還した後、ソビエツト聯邦政府の最高決議を以て、加入の諸否を決しやうとの態度を表明するに到つたのである。

ソビエツト聯邦の聯盟加入は、果せる哉、聯盟強化の爲めと考へた加入列國に、第一、この問題で、俄然豫想を裏切ることになつてしまつた。

ソビエツト聯邦の、國際聯盟加入が、國際政局に一大波紋を畫くであらうことは、今更云ふ迄もないが、之が、遠因近因を研討し更にその將來の成行を観察するには、ソビエツト聯邦の外交工作の概見が必要である。

衆知の如くソビエツト聯邦の赤化運動は支那に於ては曲りなりにも成功しつつあるが、歐洲及び小亞細亞方面は失敗し、あまつさへ資本主義諸國の重壓を被る世界赤化は愚か、ソビエツト聯

邦の、そのものは影さえ薄らぐとするの形勢となつた。此處に於て翻然として、覺醒したソビエツト聯邦當局は、先づ政權の強化を圖るの必要上聯盟諸國に對して和睦の手をさし述べ、國內の根本立直しを斷行し、一は以て經濟的に斷然資本主義國と對等に太刀打ちを爲すを得せしめ、一は以て武力的に國際反共產戰線を排撃せんが爲め、ここに五ヶ年計畫を立案するに到つたのである。之が爲め外交工作としては、五ヶ年計畫完成迄、絶対に列國の干渉を排除する爲め、一時列國と、平和状態を保持するを必要であるとして、先づ、千九百二十五年十二月トルコと不侵略條約を締結せしを始めて一九三三年九月迄にドイツ、リスマニア、ベルシヤ、アフガニスタン、フィンランド、ラトリヤ、エストニア、ポーランド、フランス、イタリーの諸國と同一條約を締結し、千九百三十三年七月には、先の諸邦と侵略國定義條約を締結した。その國はアフガニスタン、トルコ、ベルシヤ、エストニア、リスマニア、ポーランド、ルーマニヤ、チエツコスロバキア、ユーゴスラヴィア、また一九三二年十月には支那と、一九三三年十一月には米國との國交を恢復し、一九三四年の初頭、佛國及び英國と通商條約を締結した。就中、最も、顯著なるは、

大戰以來、仇敵し來つたポーランドとの禍根を棄て、親善關係に入り、亦、十六年の久しきに亘りて、斷交状態にあり、しかもソビエツト不承認の態度を、固持せし米國をして、遂にソビエツト聯邦承認を斷行せしめたことである。

それは大戰以來の、反ソ戰線の爲め、手も足も出なかつた苦境時代に比すれば、實に、隔世的の飛躍であつた。

以上は、その概容であるが、今更らに、所上諸國に對する最近の關係を述べて見やう。

佛露の提携

ソ佛關係に就ては、ドイツ、ポーランドとに對する深い關係を持つ一九三〇年の第十六回共產黨大會で、スターリンが、フランスを目して、國際反ソ運動の主動者であり、且つ、急鋒であると述べて居るやうに、過激派によつて數百億フランの債券を踏み倒された佛國にとつては、ソビエツト聯邦は長い間の敵視の的であつた。フランスにはキールイワノウキツチ大公を始め約四

十萬人からの白系露人が、亡命し、これが、政治的經濟的にも、一種の勢力を形成して、佛國並にポーランド、ルーマニア、チエツコスロバキア等に存在する反ソ戦線に公然、陰然の刺戟的存在となり、加ふるに、ソ佛間には、ソビエツト聯邦とドイツ或は英國との間に見るやうな、密接な貿易關係を缺き、一九三〇年十二月世界的センセイションを起したソビエツト聯邦讚仰と陰謀事件に就いては、前佛國首相ボアンカレーや、フランス參謀が白系將軍等と共に指導的役割を演じて居ると、ソビエツト聯邦當局に依つて發表され、ソ佛國交は、遂に決裂の危機に瀕し、正に國際反ソ戦が此方面から始まるだらうと判斷したものが少くなかつた。

一九三二年五月の佛國大統領ツメ暗殺事件に際しても、多くの言論機關は、犯人ゴルグーロラを、ソビエツト共産黨に屬する赤系露人なりとして、佛國に反ソの輿論も煽つたのであつた。事實調査の結果は犯人は、赤ではなく、寧ろ白系露人が、ソ佛斷交目的にやつた事が判明したが實際ソ佛關係は、かほどに尖鋭化して居たのである。それ故に、滿洲事變に當つて、佛國が日本に多大の厚意を示したのは、日本の對ソ關係の緊張を、その重要目標の一つに畫いて居た爲めで

あると信ぜられて居た程であつた。

然るに、ドイツナチスは、佛國の生命線たるベルサイユ條約の廢棄を眼ざして突進して來たのと、佛國の政權が近年日ソ戰爭を煽る急進主義者の手にあつたこととの爲めに、佛國親日反ソ政策にも大きな變更が來た。即ち、一九三二年の、ソ佛不侵略條約の締結を一轉機として、斯くも惡化するソ佛關係は、著しく好轉して、今日の親善狀態を、招來するに到つたのである。

佛國政治家中の、傑物たる前首相エリオが、昨年はソビエツト聯邦を訪問し、續いてフランス前航空相ヒエールコット氏一行がソビエツト聯邦訪問の親善飛行を爲し、更に、一面にあつては、ドイツ技師のソビエツト聯邦を引き挙げた後をうけて、佛國技師團が、技術的援助の爲めに、ソビエツト聯邦に赴く等、露國との友好は、日に濃かである。

勿論、ソ佛兩國間には、種々の問題や對立がないでもないが、尠くも、ナチス政權の、方針の緩和されぬ限り、ソ佛の親善狀態は永續せられるであらう。

露獨關係

ドイツとソビエツト聯邦との關係は、ポーランド、フランスとの逆を行つて居る。即ち、佛波兩國との國交は、ロシア革命の十四、五年に互つて、圓滑を缺いて居たが、ドイツのナチスが政權を掌握して、フランス、ポーランド兩國に對しても、従来の協調政策を棄て、軍備問題、賠償問題も、舊領土問題と思ひ奢つて、攻撃的態度に出で來た爲め、佛波兩國の、脅威は、最近著しき協調態度に出で來るソ聯邦には感じが薄くなつたが、ドイツはその反對となつた。その爲めはソ聯邦と一層堅い握手が必要となつて來たのである。處が、一方ソ獨の關係は、兩國孰れも、それ／＼の立場で、資本主義諸列國から、極端なる糺子扱ひされて居つた爲めに、早くから、親密で一九二二年春、恰も、ゼノア國際經濟會議開會中、チチエーリン、ラテノフのソ獨兩外相に依つて、締結されたラツパロ條約は、兩國の政治的經濟的提携に劃期的なる段階を作つたものとして、諸列強殊に、佛國の激烈なる憤怒と、脅威を買つたものであつた。

その後、ソ獨兩國の經濟提携は、益々深まる、最近まで、一二の例外はあつたが、大體に於てソ聯邦對外關係上、最も主要なる協調の前哨に立ち、不侵略條約の如きも列國に先立つて締結されたものであるが、ナチスの態度と政權獲得とは、佛國に對してのみならず、ソビエツト聯邦に對しても、非常な、對立關係を漸發し、昨年から今年にかけて、歐洲に於いてソビエツト聯邦と最も仲の悪いのはこのドイツであると成つた。何故、ベルサイユ條約に加盟國でもないソビエツト聯邦とドイツとが、かく反目するやうになつたであらうか、それには次の重大なる原因がある。

即ち、ヒトラー政權のドイツ共産黨に對する徹底した撲滅策が、ソビエツト聯邦共産黨政權の深い増悪と敵意とを挑發したのが、その原因の一つである。

ソビエツト政府がドイツとの協調を弱め、反對に、西歐諸國との協調を強めるこれが原因の二である。

それからナチスのユダヤ人に對する壓迫が自國內に多數のユダヤ人を保有するソビエツト聯邦

の反感を買つたことがその原因の三である。

中にもヒトラー政権のドイツ共産黨の壓迫は、事、國內事情で、ソビエツト聯邦が表向き、口には出さぬ。それだけにドイツに對する反感の誘因でもあつた。蓋し資本主義國中第一を占めるドイツ共産黨の強力なる存在は、如何ばかりコンミンテルンの強味であつたか、獨逸國內の共産黨勢力は、一九三二年七月に、總選舉迄は、議員總數五八二名中、一百名の共産黨議員を有し、かく政黨中、第二位を占めて居たのでも覗はれる。然るに、これが一新した國狀ではコンミンテルンに對しては大なる打撃であつた。

しかも其の撲滅後のヒトラー、ノキラート等のソビエツト攻撃演説は、益々ソビエツト聯邦のドイツに對する反感を激化したのであつた。

これは自然、經濟文化關係にも及ぼし、ソビエツト聯邦は五ヶ年計畫の爲めに、獎勵して居たドイツ技師は、どしどし引きあげ、ソ獨兩國間に交換して居た記者團も、軍人も、お互ひに追放の憂目に會つた。

一九三三年一月から、九月間のソ獨貿易は、一億九千九百十五萬九千九百九十九ルーブルで、これを前年度同期に比すれば、一億三千三十萬ルーブルの激減であることは、其間の消息を物語つて餘りある。然らば、その、前途はどうであらうか。ソ獨關係の悪化は、永久に續くであらうか、歴史的にも、地理的にも、これを各方面から考察して、ソビエツト獨關係は、必らずや、ある機會に好轉する大なる可能性を持つて居ると思はれるのである。たとへば、これを通商關係に見るも、ソビエツトの外國貿易中その第一位は常にドイツであつた。ドイツとしては、ソビエツト聯邦の輸出する穀類其他の農産物、石油、木材、マンガン等は、是非共なければならぬ品物であり、又、ドイツの製産する金屬機械類、化學藥品等は、工業發展の過程によるソビエツト聯邦の、是非共必要とする品物である。しかも、ロシアの商業習慣を最も熟知するものは、ドイツである。

長期に互る取引は、妙からずロシアに、恩慶を與へたものであつた。ドイツの幾多の大工業會社は、ドイツ政府の輸出保償の下に、三億とか二億とか、膨大なる生産品を、長期契約を以て、買賣りをして、ロシアの五ヶ年計畫を助け來つた。更にドイツは尙ほ、五億以上乃至七億マーク

程度の、受取り勘定を持つて居る。かく、見れば、單に貿易の一點のみでも、ソ獨の國交復舊は可能性なしとは、斷言出來ないであらう。

ロシア・英國關係

ロシア、英國の大戦關係は、いくつかの變化に富んだ段階を経て、今では、やつと落付いて來た。英國もドイツに次いで、對ソ經濟關係は、ロシア帝政時代から密接なる關係であつた。

然し乍らボルシセビイキ政權の實現と、赤色國家の其後の擴大強化とは、他の何國よりも英國に對しては脅威であつた。

云ふ迄もなく全世界に植民地を有し、凡て老衰期に互つた老大英國は、ソビエットの赤化目標として誠に格好のしろものである。従つて、ソビエット聯邦の赤化方策は、英國本國は素より、ペルシャ、アフガニスタン、印度、支那、新疆等の全東洋英國植民地に向つて、執拗に大規模に行はれたものであつた。

さうして、ソビエット聯邦は、相當に赤化の成功を納めた。然るに、一九二〇年眞先きに、對ソ武力干涉から手を引いて、ソビエット聯邦に通商條約を締結したのは英國であつた。又一九二四年一月、第一次マクドナルド政府の樹立に依つて、日佛伊米國等の聯合諸國に先んじて、ソビエット聯邦を正式に承認したのも英國であつた。

しかも、英國は、一九二五年俄然、通牒に依つて、斷固とした對ソ抗議を發した。又、一九二七年五月英國胃漬のゼネストをソビエット聯邦が、援助したことを、怒り遂に對ソ國交を斷行した。然るに一九二九年五月、マクドナルドの最後の失權後、再びソビエット聯邦を承認して、國交を復興し、翌三十年四月には、暫定通商協定に迄進め、鮮かな轉化ぶりを示したが、又々一九三三年七月には、ソビエット聯邦の英人技師逮捕事件に原因して、對ソ通商斷交を行つたかと思ふと、又もや、二月を出でずして、再び正當の刻下に入つたと云ふ轉換振りである。

前述の如き英國はソビエットの重要な貿易國であり、英國はソビエット聯邦にとつて、最大の受取り勘定の國である。で、その英國向ソビエットの輸出品の主なるものは石油、木材、パタ、

穀類等であるこれを見ても、將來英露の關係は、注意を要するのである。

ポーランドとロシア

ポーランド共和國は歐洲大戰後、ベルサイユ條約によつて急定した、ロシア及びドイツ帝國の支配下から開放された國である。この國が他の沿海バルチック小國よりも、比較的強大であるのは、それによつて、ドイツ、ソビエツト兩國を牽制せんとする佛國に傳統的政策が與つて力あるのである。従つて、ポーランドとソビエツト聯邦との關係は、自然増悪と、反感そのものであつた。

媾和條約は一九二二年三月、他の沿海バルチックの小國より、約一年遅れて居るばかりでなく、何等友好的ではなかつた。一九二二年から一九二四年頃にかけて、カリシヤ問題や少數民族問題で、戰爭の斷間なく、殊にポーランドの全人口三千五百萬中、ウクライナ人四百五十萬人、ユダヤ人三百五十萬、と云ふ有様である故、やゝもすれば、ポーランドのウクライナ人は、同じ血の

繼がるソビエツト、ウクライナ人を開放せんと、絶えず策動したものである。彼の、ウクライナ開放同盟陰謀事件は、その一つの例證である。一面にありては、ポーランド内に於ける不明白系露人が、又ポーランド人支持の下に、反ソ運動を絶えず行つて、ソビエツト聯邦の神經を、いやが上にも尖がされたものである。しかも、ポーランド駐劄ソビエツト公使ウオイコフ氏の暗殺事件が、白系露人によつて、企てられ、又、同様に、ワルソー、ソビエツト公使館が、焼打ちせられるゝ等の事實は、ポーランドの白系露人支持支援を、さながら裏書した様の感があつた。

一九二五年一月には、ポーランド政府の、音頭取りで、反ソバルチック聯盟を策し、他の國際聯盟乃至佛蘭西の指導に依つて、ルーマニア、ユーゴスラヴィア、チエツコスロバキア等の反ソ色彩濃厚なる小國と結結して一つの大同團結を形造つた。かくの如き狀勢で、ソビエツトとポーランドとの國交は到底好轉され様とは思はれなかつた。

然るに、一九三二年末並びに一九三三年頃から俄然形勢逆轉した。こゝも、ヒトラー政權の強硬政策は大なる役割を演じて居る。もとポーランドはソビエツト及び獨逸兩國の舊領土を出来る

だけ、取り上げて、ポーランドを強硬なるものに作り上げやうとしたのであつた。

ポーランドと、唯一のポーランドの海への出口であるダンチツヒとを結びつける爲めに、作られたものが所謂ダンチツヒ回廊であつた。これが爲めにドイツ領土は中斷され東プロシヤは本國から、分離された事は尠なからず、ドイツ人の含む處であつたのみならず、人民投票の結果、上部シレジアの大半をポーランドに併合された事は、愈々ドイツ人の不平不満を、醗酵されたのであつた。ヒットラー政権が、ポーランドに向つて強硬政策に出るのも、事實、これが爲めである。ポーランドとすれば、ドイツ、ソビエツト兩國の狭撃工作の措置の脅威である。

ドイツに付くかソビエツトと手を握るか、その孰れかを取らなければ、立ち行かぬは、ポーランドの状態である。謂んや従來のバトロンたるフランスが最近ソビエツト聯邦と日に親密を加へつゝある現下の状態にあつては、ポーランドがソビエツト聯邦と握手するのは、けだし當然の歸趨であらう。

米露關係

ソビエツト聯邦と米國とは現在の世界經濟線に於ける兩極點である。即ち、國際資本の王者を占むるものは米國である。ソビエツトはその異端者である。

凡て根本的對立の運命を持つて居る英佛獨伊、諸列強が、八年以上乃至十二、三年の、長期に互つて、既に國交を恢復してゐるのに米國は過去十六年の長きに互つて、遂にソビエツト聯邦を承認しなかつたのは、又、之が一因でもあつた。

一九一七年三月ケレンスキーの民主主義革命政府の、樹立せらるゝや、之に對しては相當敬意を示したアメリカ政府であつたが、同年十一月七日のボルセエビキ革命に依つて、プロレタリアの獨裁政治が敷かれ、急激なる資本の取奪を斷行し、よく翌一九一八年二月に到つて、一切の外債をなくし、外國人の財産を沒收するに及んで、米國は深刻なる敵意と憎惡を持つに到つた。その米國が、始めの對ソ政策は、この憎むべきプロレタリア獨裁國を經濟封鎖と武力に依つて

撃滅することであつた。米國は日本を喰かして膨大なる兵員をシベリアに送り、又、北露アルハ
 ンゲルスク方面からも之を攻略し、或は反革命政府を、その豊富なる財力に依つて積極的に援助
 したのも、これが爲めである。處が、此の革命ロシアが案外に、ねばり強く、一方にあつては支
 持する處の政權が全く鳥合の衆にして、頼るに足らず一方にありては列強は歐洲大戰に疲れ果て
 い、もはや武力干渉の餘力はない。これでは容易に防害しないと云ふ見通しをつけて、共同出兵
 をした日本をシベリアに残して、さつさと露領から撤兵してしまつた。だが、米國のソビエツト
 聯邦に對する憤怒は決して、納まつたのではない。果せる哉一九二〇年八月十日、當時の米國々
 務長官コルビー氏が發した宣言が有名なソビエツト不承認の宣言、コルビーノートである。その
 要領は、國際信義を無視し、法を蹂躪するやうな不徳義極まるソビエツト政府を正式に國家主權
 として到底承認し得ない、と云ふのである。

一九二一年には、ヴォルカ流域地方に發生した歴史的な大飢饉に對して米國政府は、救濟委員
 會を組織し、同年八月米ソ兩國代表間に、右救濟事業實施に關して協定が實施された。

けだし米國は大戦に續く革命、内亂渦中に大飢饉のあつた處の重難のソビエツト聯邦に對して
 人道的見知から、大規模の物質的援助を與へたのであつて、此の事件はソビエツト聯邦の對米感
 情を著しく緩和したけれども、米國にとつては、それは全く別問題であつて、ソビエツト國家承
 認の前提でも何でもなく、却つて、一九二二年五月には當時の國務卿ヒューズ氏に依つて、コル
 ビーノート一層公式化した處のソビエツト不承認の、最大原則が承認されたのであつた。その要
 項は、國際義務の廢棄、米國人財産の沒收、共產主義の宣傳、この三大原則であつて、これは、
 ヒューズ國務卿が、米國商業會議所に於て、試みたるものであつたが、その性質上、尠からず、
 政界に衝動を與へ、又、最近までの米國政府の對ソ政策を基礎づけたものであつた。

勿論その當時から米國內にも、ソビエツト承認運動が全然なかつた譯ではない。上院議員で、
 外交問題の立者ボーラ氏、レーゲル氏、下院議員のゼームス、ブーヤー氏一派は政界に於ける積極
 的ソビエツト承認の論者であり、又、ソビエツト聯邦と商取引關係を有する、實業家の一部及び
 親露派インテリゲンウヤの間には、早くからソビエツト承認が提唱されたものである。一方にあ

つては、英國、イタリー、フランス等の諸大國が、一大轉換を行ひ、相續いて、ソビエツト聯邦を承認し、それと正式國交を締結し、更に一九二五年一月には、日本が進んでソビエツトを承認した事實は、米國側を刺戟すること極めて大なるものがあつた。それにも係らず、米國政府が、諸外國の對ソ政策の轉換を尻目につけて、斷固として、ヒューズの不承認原則を立て通して來たのには、如何なる原因があつたか、思ふに、歐洲諸國に對する、膨大なる債權國たる米國は、ソビエツト聯邦の外債破棄の態度は不快極まるものである。若し、歐洲國の孰れかに、ソビエツト聯邦の外債破棄の態度に追従するものが出ぬとも限らない、それには先づソビエツト聯邦の外債破棄の態度に絶對的否認の態度を執る必要があつた。従つて、國際資本の覇者として、階級的異端國に對する憎惡が、最も熾烈であつた事である。次には米國はソビエツト聯邦の特に頼るべき經濟政治的必要性が、他國より最も稀薄であつた。最後のものは、最近に到つて、この米國の多寡をくつた、態度を裏切つたもので、それは、ソビエツト、米國間の交易の道は、一九二〇年以來開かれて居り、この點で、形式、獨立、實質等の一致を絶對的必要とはしなかつた。と云ふの

にあつたであらう。然るに最近二三年に於いてルーズベルトを大統領とする民衆と政府が、歴代の共和黨内閣に更迭して以來、米國の頑強なるソビエツト不承認の態度は、著しく緩和され國內に於けて承認運動は、從來に比すれば遙かに、現實性を負びるに到つた。

この原因は政界、經濟恐慌の深刻な打撃であり、國際情勢の變化であり、由來米國にとつて、ソビエツト聯邦は重要な輸出市場であつた。それが最近に到つて激減したものは、主として、一には世界的不況の影響ではあるけれ共、一面に於ては、ソビエツト聯邦の對米感情の悪化が原因であつた。

今、最近の米ソ貿易の景況を見るに、一九二九年から三〇年度に亘る二年間が三億二千四百八十萬ルーブルであつたものが、三一年には二億五千三百四十七萬三千ルーブルに減じた迄は世界的不況の反影を見るべきであるが、翌一九三二年に一舉四千八百七十二萬七千ルーブルに激減したのは、何を物語つて居るであらうか。

米國內の反ソ運動は、しばしば行はれた。たとへばソビエツトの小麥粉輸入反對運動の如き、

木材輸入禁止令の如き、又、思想上の方面はあつては在米貿易機關たるアムストルグを、赤化宣傳にありとして、それに壓迫を加へたのは、二三の例證である。

それが、反影は忽ち、米ソ貿易の激減となつて現はれて來た。けだし國營貿易であるロシアは、容易に之が報復手段を講じ得るからである。

空前の不況に、たゞさへも、狼狽してゐる米國は、此の對ソ貿易の激減に、驚愕を禁じ得なかつたのである。ソビエツト聯邦は、もはや、米國にとつては經濟的にも政治的にも、無視してゐる存在ではなくなつた。

ソビエツト聯邦との國交恢復に依つて、極度に長縮沈滞する米國商品の輸出市場を擴張するところとは、米國經濟界の重大なる關心事たらざるを得なくなつた。

即ち、有力なる政界、財界、方面には速かにソビエツト承認に依つて、對ソ輸出を二億ドル以上三億ドル迄増額すべしとの議論が高潮せらるゝに到つたのは、米國のソビエツト聯邦承認具體化の一大原因であつた。更に米國のソビエツト聯邦承認を速進せしめたものは、日本に對する現

政策である。

即ち、滿洲上海事件は、一部の反日論者をして、切齒扼腕せしめたが、たとへば、ルーズベルト大統領に、ソビエツト承認の請願書を提出した處の八百名の大學教授連名の、連署を朗讀したラインホルトニーバーの如きは、東洋の事態を觀し得ず、日本の帝國主義的行動を阻止する事の出来なかつた最大の理由は、米國がソビエツト聯邦を承認して居なかつた爲めである、と迄、強言し亦、有名なる評論家ルイスフイシャー氏は、滿洲國絶對不承認のスチムソン主義を採決した米國としては、これを有効ならしむる方法として、米ソ國交を締結しなければならぬ。ソビエツト聯邦は米國と極東に於て、共同動作をとる用意を要する。かくの如き公表せられたる幾多の言論は米國政府のソビエツト聯邦承認の眞意が奈邊に存じて居るかを、明々白々に吾人に宣明してゐるものではないか。米ソの國交復興が經濟上如何なる結果を齎すかは、豫斷すべくもないが、翻つて、ロシアの第二五ヶ年計畫、かの或るソビエツト聯邦の經濟事情を考慮する時は、果して、一部米國の政界財界で、期待するが如く、一舉に、二三億ドルの輸出額に膨張するか否か

全く疑問でめる。

此の方面に於ては、米國は或は失望することであらう。

日本牽制に就いては日本が、嚴然たる態度を失はざる限り、米ソ間の特殊な反日的政治同盟の如きものが成立し得ないことは明らかである。まして況んや、米ソ兩國間には種々の對立や問題が交錯して居るからである。然し乍ら、ソビエツトの意識的外交に依つて、一定の親善關係が促進され、更に又、ソビエツト聯邦が、資本主義國に應じて、國際聯盟に加入した事は尠ならず米國の好感を乞ふたであらうし、結局之が日本に對して何等かの壓力とならうと云ふことは、豫斷するに難くない。

まして、一九三六年の國際情勢を前にひかへてゐるのであるから、今後に於ける情勢は計り知るを得ない。

ソビエツト東漸と極東政策

露國の、東漸は、十六世紀の中府に始まつたので、イワン四世の時先づ、東漸の大法を固め、コサツク酋長エルマク歸順するに及んで、一六〇九年にはトムスク市を建て、一六四四年にはハバロフスク地方に進出して、黒龍江流域を平定し、一六四八年には一擧、カムチャツカに遠遊して、米國大陸に、この翼を張ると共に、一面南下して、千島群島に侵入し、我が國境を、脅かしたものであつた。

その東露侵略政策は今日もロシアに繼承されて居るのである。レーニンは、米のプロレタリアは世界革命の前衛にして、東洋の否壓迫民族は、世界革命の豫備隊なりとの、遺書を殘して一九二四年死没したけれども、そのレーニンの企圖した世界赤化の政策は爾來、嚴として統襲されて居る。

レーニンの企圖した世界赤化政策は、戦後の創痍癒へず、資本主義に爛熟した西歐文化國に對

してふり向けられ、ドイツ、英國、エストニア、ハンガリア、ブルガリア等の諸國で赤化革命に於て、一舉、歐洲の總革命を惹起せんとしたのであつたが、それ等が全部、失敗に歸したる時に最後の豫備隊として東洋に對する赤化を眞剣に企てるに到つたのである。

即ち、東洋にあつては、被壓迫民族の支那四億、印度三億一千餘萬の民衆を赤化する事によつて、間接に、これ等をめぐる資本家に對し、徹底的な打撃を加へんするものであつて、資本國に對する内面攻撃であつた。

大正九年ウランゲルの率ゆる白衛軍の殘黨が蒙古に逃れると、蒙古政廳の依頼であるとの口實を設け、赤軍を外蒙古に侵入せしめたるを契機として、大正十三年遂に外蒙古赤化を完成した。

そして更に支那中原に進出し、一舉支那革命に、驀進したのであつた。

楊子江沿岸は、早くから赤化の目標となり、一九二七年ボロチンの失脚と共に、一時勢力沈滞したが、コンミンテルン極東局が少し復興すると共に最近著しく鋭鋒を現して來た。

この活動機關の整理に努力し、上海コンミンテルン根據地を確立し、ソビエト聯邦支那駐劄

外國要人を悉く、有力なる共產黨員を以て主とし、しかも、これに配するに支那側の注意を避くる爲め、その支那の親米的傾向を利用して、米國共產黨員をして、實際的策謀に従事せしめて居る。

又、支那本上の赤化は、進展止む處を知らず、一九二六年、二三萬に過ぎなかつた共產軍は、今やコンミンテルンの指令に依つて動く四十萬の共產軍が、廣西省スイキンを支那共產政府の根據として、廣西、福建、安徽、河南、湖北、湖南、山西、四川、支那八省に亘るソビエト地區に蟠居し、蔣介石の頭痛の種となつてゐる。

更に、滿洲事變に世界の耳目を集め、一方に在つては、中華民國が、抗日對策に、無中となつて居る間に、新疆省赤化の魔手は遠慮なく伸びて居る。

第一次五ヶ年計畫中、支那西域に依つて建設せられたトルクシブでは、經濟的にも政治的にも、新疆と更に密接なる關係になつたので、新疆が第二の外蒙古たるは遠き將來ではなからうと思はれる。

最近の消息によれば、ソビエツト聯邦の新強省に對する進出は、特先權を把握するばかりでなく、一箇師團を進入せしめ、公然、侵略を開始したと傳へられてゐる。

シベリア輸送力増加

更に極東政策を經濟方面より見れば、一九二八年、第一次五ヶ年計畫を計畫して、その實行に入るや、無限の資源を有するシベリアの沃地は農工の發展地域となつた。然して、これが開發の爲めに第一に着手せられたのは、前述のトルクシプの建設であつて、シベリアの中心とトルキスタンとを結ぶ外蒙新疆國境に進出延長線四百キロの地で聯結された、これが、けだし政治軍事上多大の價値を有するは多言を要せざる處である。

次にソビエツト聯邦は、ウラル及びグズバス地方に工業中心地の建設に着手した。從來ソビエツト聯邦大工業の中心は、ドンカワの中心であつたが、今や、ウラルノテツト、グズネツクの石炭とを結びつけて、製鐵年額二百五十萬噸を企圖して居る。即ち、こゝだけでも全日本の産鐵額

の二倍に相當するのであつて、このウラルグズバスの建設が經濟上に重大なる意を有するは勿論、特にソビエツト聯邦の東方經營發展の爲めには、その急轉の東方躍進である。まことに軍事上及び政治上注目を要する處である。

シベリアの發展に伴ひ、同地方の鐵道輸送力増加を要求するに到つた事は自然である。これが爲め目下シベリア幹線の改善、平行鐵道の建設に努力してゐる。最近オムスクウハー間の復線工事、その他鐵道増設工事完成を見、又シベリア鐵道南方平行線たるクスタナイより、カラガンタに到る鐵道は更に延びて、セミバラチミスクに出で、トルクシプ鐵道に結ばれる様である。更にモスコ、イルクーツク間並に、トルクシプ鐵道に、イルクーツク、ウラジオ間に、ババロフスク、カパフト線に、ソビエツト聯邦の東方進出には、多大の貢獻をなすに到つてゐる。

以上の如く從來、たゞ一條のシベリア鐵道を有するに過ぎず、農業も何等見るべきものもなかつた西部シベリアは、現在既に、工業及び、交通上の著しい進歩發展を見せてゐる。これが極東に延びるにも、こゝ數年も出でぬであらう。

かくて、ソビエツト聯邦五ヶ年計畫の遂行は軍事的立場から觀察すれば、誠に重大なる進展をなしたのである。即ち、大計畫の矯矢たる重工業の發達は、凡て軍事工業の要素であると稱するも過言ではない。現に昨年當初、スターリンの第一次五ヶ年計畫の演説中、ソビエツト聯邦の、國防成れりと豪語するを見ても明かであり、既にソビエツト聯邦當局は全く戦時同様の意氣込みと状態とを以て、五ヶ年計畫を四ヶ年で、完了し、更に一昨年明けより、第二五ヶ年計畫に幕進しつゝある。そして第二五ヶ年計畫も依然として、重工業に重點を置いて居るばかりでなく、地域的極東對法を以て、第一として居るのは、特に注目を要する處である。又、數年來、毎年、數萬の常置兵を極東移民として、ソ滿國境地帯に移住せしめ、共營農工業に（ユルホーズ）従事せしめて居ることは、ソビエツト聯邦將來の企圖の奈邊に存するか、察知するに到るのである。

革命後の十七年

大觀するにソビエツト聯邦の第一次五ヶ年計畫の段階は、これを四分し、ソビエツト政權確立

時代、内亂時代、新經濟政策時代、及び第一次五ヶ年計畫時代と區別されるが、一九三三年初頭から、革命十七年の沿革中、第五の段階に當る時期は第二次五ヶ年計畫である。第一の段階は一九一七年の十一月から、翌十八年の半ば頃迄を指すもので、ロシアの難關舊制度を廢して、新制度を法律的に又、行政的に確立すべく全力を傾注した。第二は、一九一八年から二〇年に到る二ヶ年半乃至三ヶ年で、國內各地に蜂起した反革命並びに、これを支援した資本主義列強の武力干渉に對する熾烈な闘争の時代であつた。

第三は内外の反革命軍を破つた戦争と飢饉と、内亂に依つて、崩廢の極に達した國民經濟を復興すべき過渡的經濟制度即ち新經濟政策を採用した時代で、一九二一年から一九二七、八年に到る時期が、それである。第四は即ち、第一次五ヶ年計畫の時代で、國民經濟の社會主義下の基礎工事の段階であつて、これは或る部分に到る無理を伴ひ乍らも、その重要な對照に於て成功し、第二次五ヶ年計畫の基礎を組成した。第五、即ち一九三三年より開始せる第二次五ヶ年計畫の時代は、ソビエツト聯邦が、愈々社會主義本建築に着手した時代で、一九三四年が今や、その第二

ケ年目に當つて居る。

第一次五ヶ年計畫に重要な課題は國民經濟の社會主義的工業化を實現し、工業の社會化を斷行し、文化革命の達成を計り、それ等を通じて、フノーネツプマン牧師を始め、ソビエツト既成階級から一切の過程努力を奪ふ事であつた。

最初一九二八年十月から、一九三三年の九月末に到る、滿五ヶ年を其の遂行期間とされたが、遂に一年をくり上げて、一九三二年末に到る四ヶ年と三ヶ月を以て遂行されたのであつた。その結果は、ソビエツト當局の發表に依つて、その大要を録する事にする。もとより相當の割引が必要であるが、工業生産と、農業生産の關係は根本的に、工業生産の有利に變更され、工業の比重は一九二七年度に四八パーセントから、一九三二年には七十パーセントに達した。

一九三二年の工業生産高は戦前の追従に比較すれば、三百三十四パーセント、五ヶ年計畫最後の成果は、五ヶ年計畫最初の豫定の九十三、七パーセントを占めた。當時は五ヶ年計畫が、五ヶ年の爲めに豫定せる一八〇億ルーブルに對し、四年三ヶ月間に二百三十三億ルーブルを示し

た。

農産物播收面積は一九二八年度に比し、二千一百万エクタールを増加した。一九三二年に到る四年間に二千四百四十六個所の最新式機械トラクター配給所が設けられた。一九三二年に到る三年間に、農民全數の六〇パーセント全播收面積の七十五パーセントを包含する二百萬餘のホルホーズが組織された。同一期間に五千のソウホーズ組織された。引續き一九三三年から、第二次五ヶ年計畫が開始されたのであるが、その重要任務は新技術の把握、勞働生産制の工場生産費の減縮、及び従來の重工業偏重主義を改め、輕工業の新興策を計ると云ふ點にあつた。

この第二次五ヶ年計畫の全部は、一九三四年一月の第十七回共產黨大會に於て、始めて明らかにされたのであつたが、計畫最終年度に於ける全工業の、その生産高は一千三十億ルーブルと査定され、これを第一次五ヶ年計畫末年度の四百三十億ルーブルに比較すれば、二倍半に相當する。第二次五ヶ年計畫初年度たる昨一九三三年度にソビエツト聯邦に大工業生産總額は三百九十六億ルーブルであつて、これを前年度に比較すれば三十五億ルーブルの増額で、又昨年度の農業

實績は、總收穫八億九千八百萬セントネルに達し今日迄の最良農作たる一九三〇年に八億三千五百四十萬セントネルに比すれば約六千三百萬セントネルの増收であつた。

北鐵讓渡交渉の経緯

日蘇滿三國間の重大懸案は、日々の新聞紙が已に之を報道して居るやうに、北滿鐵道賣却問題である。獨立せる國家としての内容と形式とを充分に兼備しなかつた舊東三省政權の時代には、北滿鐵道も蘇支兩國の共同管理でよかつたが、その時代に於てすら支那側の積極的態度のために、種々な問題が兩國間に絶えなかつたのである。ましてや日本の生命綫的盟邦として、滿洲國家が生れ出で、政治的にも經濟的にも、強力な發展を示しつゝある今日、他國の權益に屬する鐵道が、その領土の中樞部分を貫通して居るといふが如き變態的現象は、永く續けらるべきでは無い。況んや此鐵道が、滿洲國とは全然建國の精神を異にし、思想的に相容れない社會主義聯邦の權益であるに於てをやである。

斯る政治的情勢と、一方又は北滿鐵道の培養線が盛に滿洲國によつて建設され、従つて北滿鐵道の價値が著しく低下するといふ經濟的情勢を考慮した蘇聯邦は、自ら進んで北滿鐵道の賣却を日本政府を通じて滿洲國に提議し、日滿兩國も之を諒として昨年六月から、東京にその讓渡交渉を開始したのであつた。

爾來該交渉に關する蘇聯の怪文書事件だとか、滿蘇兩國建國の大きな開きだとかのために、交渉は幾度か停頓し、漸く本年三月になつて廣田外相の斡旋により、交渉第二段に入つたのであるが、日滿兩國が極東平和の大局的考慮から、幾度か思切つた大讓歩をなし、殊に今年八月に入つて、廣田外相が最後の調停案を示し、滿洲國が之を受諾したにも拘らず、蘇聯側は依然高値を持つて譲らず、其態度に毫末も誠意の認むべきものなく、八月十日ユレニエフ大使によつて齟齬した蘇聯政府の回答も、何等反省の實が示されて居なかつたために、交渉は遂にデッド・ロツクに乗り上げ、大橋滿洲國代表も匙を投げて、八月十四日日本を引揚げて歸滿するに至つた。

日蘇諸懸案解決の鍵

蘇聯が何故に不當なる高値を持ち、廣田調停案に同意しないかといふ事に就ては、種々の觀察が下されてゐる。昨年五月、リドヴィノフ蘇聯外相が我が駐蘇太田大使に、北鐵讓渡を提案した頃から見ても、蘇聯邦の對外關係は著しく改善され、その生命線とも稱すべき西部國境方面が安定した爲め、急に極東方面に強くなり、賣却の實意なくして唯だ形式を弄して居るといふのがその一つである。また、米、英、佛等の諸國に對して、その對日強硬振りを示すことにより、一種の信用を贏ち取らんとするにあると見るのもその一つである。或はまた、相當高値を出しても、結局は日滿兩國が従いて來ると、自ら高を括つて居るのだと看做すのもその一つであらう。だが茲では蘇聯の肚をあれこれと憶測するを止め、唯だ言はんとすることは、蘇聯邦にして依然法外の高値を持ち、或は懸引外交の具に該交渉を利用し居る限り、換言すれば、北滿鐵道の正當なる評價に立ちかへり、日滿側に眞の誠意を示さぬ限り、交渉は何等解決の曙光を見ず、日滿蘇關係

を益々悪化させるに役立つのみであらうといふ事である。

北鐵交渉は、それ自身大きな日滿蘇外交の懸案であると共に、爾餘の諸重要案件、例へば北洋漁業問題とか、北樺太石油利権問題とか、或は蘇滿國境問題とかを、解決に導くか暗礁に押し上げるかの大きな鍵である。北鐵交渉が前途に引つ懸つて居る限り、爾餘の諸問題も亦た引つ懸つて居る外は無い。従つて北鐵交渉の成行は、日滿蘇關係の前途をトせしむるものである。

しかし、北鐵讓渡問題は、又もや蒸し返して來たのである。それはソビエツトに讓歩の氣色が見えて來たので、廣田外相は又も、日滿解決の爲めに乗り出して、大橋滿洲國外交部次長に招電を發した。

大橋次長は九月二十六日午前九時半、外務省を訪問して、東郷歐亞、桑島東亞兩局長と會見して、更に、同十一時三十分から廣田外相、重光次官とも會見し、交渉再開に就いて種々打合せを遂げて正午辭去したが、この打合せの結果、今後の折衝は、價格の一億四千萬圓は、既に決定してゐるため、この支拂方法、退職資金の約三千万圓等の大綱について、廣田外相、ユレニエフ

大使間に交渉を進め、その決定を待つて、満洲國代表大橋外交部次長、露國代表カズロフスキー、極東部長間で、細目にわたる折衝を開始し、最後に大橋代表、ユレニエフ大使兩者間で、取り極めを行ふことになつた。

そして、北鐵讓渡にからまる財務關係の問題に就いては、星野滿洲國財政部總務司長が、二十日午後四時五十五分着「富士」で入京するので、同氏の上京を待つて打合せが行はれることになつたが、大體この資金は、滿洲國の公債として、東京で、一般の公募に附する豫定であると云はれて居る。

この再開協議で、英國などは、ソビエツトの滿洲國承認の前提であり、極東の危機は未然に回避されたものと云つて居るが、我が林陸軍大臣は、九月二十六日の東京日々新聞紙上に於て、「北滿鐵道讓渡の交渉成立が日露滿露の關係を俄かに好轉せしめるものとはならぬと思ふ」と云つて居ることに見ても、これを以て、輕々に安心する事は出来ない。

北洋漁業問題と暫定協定

乍併、爾餘の諸懸案も亦た、それ自身獨自の大きな意味と内容とを有つてゐるのであつて、其等に就て一定の概念を有し、之が認識を誤らぬことは、日蘇關係が全面的に重大化したる今日、我等國民としては最も必要な事であらう。

日蘇兩國の漁業關係は、最近の數年間に種々の段階を通過して居る。先づ最初の重要段階は、昭和三年一月の日蘇漁業條約締結である。該條約は日露戰爭の結果として獲得された我が北洋漁業權益を、ロシア革命後の新情勢に即して調整したものであつた。

然し此調整には種々の無理があつた。個々の條項に就いて言へば蘇聯國營漁業の漁區取得方法とか、蘇聯國營漁業と個人漁業との關係とか、又は漁獲標準高だとかの問題になるが、より以上もつと根本的に之を見れば、日蘇基本條約の明確な規定により、ポーツマス條約の完全な効力存續を認めさせるといふ日本側の方針、換言すれば、日蘇漁業條約締結當時、日本側八、蘇聯側二

といふ日本側にとりては有利な漁業對勢を、存続せしめんとする我國の根本方針と、ロシア革命後の變化したる情勢に則り、前記の漁業對勢を轉回して、自國を優勢に導かんとする蘇聯側の根本的態度とは徹底的に解決を見ることなく、漁業條約そのものの中に残り残されて居たのである、そこで漁業紛争は、日蘇漁業條約が始めて發効した昭和四年、早くも未曾有の鋭い形で勃發した。條約の自恣的な解釋により、その宗主權を利し、統制經濟を武器として遮二無二進出する蘇聯側は、年々急速にその經營漁區を増加し、昭和三年、八對二であつたものが六年には五對五に近い所まで躍進した。その間、日蘇漁業問題は紛糾に紛糾を重ね、兩國外交の中心問題となつて了つた。

然るに昭和六年滿洲事變を契機として、期待權益擁護に對する日本の重大なる決意が中外に示されるに至り、蘇聯は北滿に於て退却したばかりでなく、北洋漁業に於ても妥協に轉じて來た。之を如實に示したものは、昭和七年八月、廣田、カラハン全權間に締結の日蘇漁業暫定協定であつた。この協定によつて、日本の經營漁區は昭和十一年の現行漁業條約改訂期迄安定した。此の

暫定協定締結を、日蘇漁業關係の第二段と見てよからう。

停顿せる日蘇漁業交渉

然るに蘇聯邦西部國境の安定、昨年度の穀物生産の大増獲等内外情勢の變化によつて、蘇聯の日滿に對する態度に變化が齎らされ、その極東軍備は時と共に鞏化し、恰も（寄らば斬るぞ）の身柄へが出来るに及んで、滿洲事變以來の全面的退却讓歩は打切られ、開き直つて來たのである。彼のセンチションを捲起した北鐵交渉怪文書事件に、我等はその最初の表現を見出したが蘇聯政治家の對日強硬言辭等の上にも表はれて來た。と共に、北洋漁業に於ても蘇聯の強硬方針は、從來とは稍異つた形で示されて來た。

即ち今年上半期の、本邦露領漁業家による借區料支拂に際して、蘇聯は、幣原トロヤノフスキ協定による漁區料の換算率、一留一卅二錢五厘換を一方的に破棄して、一躍七十五錢と云ふ二倍以上の高値を押しつけて來た。然し實際には、幣原トロヤノフスキ協定は、その有効期限を明

示せざる協定であり、且つ日本の圓價は協定當時に比すれば六割方下落したため、蘇聯經濟機關の受取る借區料實價は半分以下に減額した。而かも一方日魯漁業會社始め日本の漁業家は、圓爲替安を利用して、外國市場に於ける商品の受取勘定を倍増して居るといふのである。

之に對し日本側は、苟も國家間の協定を一方的に破棄することは、國際信義上許し難き違法行為であるといふ法律上の建前と、蘇聯側の云爲する圓價下落が、何等換算率値上の根據にならぬといふ理由を主張して、絶對非妥協の態度を取つて對抗し來つたのである。

斯くて蘇聯側は、日本の合理的主張の前に、終に七十五錢強制を撤回し、六月十九日以来白紙の状態に於て換算率交渉を開始するに至つた。而かも日本側は該交渉に於て値下の必要を認め、蘇聯側は値上げを目標として居るのである。その後交渉は何等進展を示さない。

北樺太石油利權問題の重點は、同社の試掘利權期限が、昭和十一年に迫つて居るのに對し、蘇聯側が之が延期を拒否して居る點にある。此問題も漁業問題其他と共に、北鐵交渉の解決を繞る日蘇外交關係の好轉によつてのみ、好轉するであらうことを識者は信じて居る。

日露戦争か？

歐米諸國では、極東就中滿蘇國境方面の情勢を目して、世界の火藥庫であると云つて居る向が少くない。之が當否は姑く措くとするも、蘇聯邦が日本を目的にして、毎に日蘇戦争の危険が迫つて居るかの如く宣傳し、剩へ單に宣傳のみに止まらず、その極東軍備を急速に擴大惡化したことは事實である。

バイカル以東の兵力は、

- 一、歩兵九師團、騎兵一個師團半、この兵力十五萬。
- 二、ケ・ベ・ウ六聯隊「コルホーズ」師團三、此の兵力三萬。
- 三、飛行機三百五十機、内重爆撃機及航續距離二千五百キロを飛行し得るもの六十機。
- 四、戦車三百臺。
- 五、潜水艦十二隻（浦羅斯德）

が、その現兵力である。

その爲に極東の情勢が、非常に緊張して居るかの如く諸外國からは觀測され、日蘇戰爭説は恰も波の起伏する如く、若干の時間を置いては、歐米支那方面から盛に喧傳されて來るのである。

日滿兩國に、故なく諸外國と事を構へやうなどといふ考の微塵も無いことは、少し公平な見方をする第三者の、何人も一致して居るところであると同様に、蘇聯側も亦たその國內事情や國際關係から判斷して、進んで開戦する意圖を有して居るとは思はれない。否な寧ろ、戰爭を避けたい。が、萬一の場合に日本を孤立に陥るための手段として、恰も日本側が働きかけ、それ故に戰爭の危險が切迫して居るのであるかの如く世界に宣傳し、且つ日本恐さの爲に軍備強化を計つて居ると見るのが冷靜な見方であらう。

乍併、日蘇兩國の支配的の意圖が、事を構へるといふ事でもなくとも、蘇聯の現狀に見らるゝ如く、國境方面で盛に軍事工作を進め、日滿側が又た之に對する防衛工作の必要に迫られて居る事實は、絶對にそこに不測の禍を招く虞が無いとは言ひ得ない。現に過般滿洲國の軍艦が黒龍江を

航行した時、對岸の蘇聯側から砲撃された事件の如きあの際滿洲側が、極めて冷靜な態度で事に臨んだから好かつたものゝ、萬一暴に對するに暴を以てする態度で應戦したらどうであつたか、一旦遣り出したら機先を制して勝たねばならぬといふ戰の原則から見ても、重大事に變化しなかつたとは何人も豫斷出來ないであらう。

しかも最近、滿露國境方面に於けるソビエツト側軍憲の不法行爲は、滿洲國側の嚴重な抗議をよそに、先のウスリー河と、黒龍江との合流點三角洲に於ける軍事施設、ソビエツト軍用機の滿洲里不時着陸事件など頻々と繰返され、滿露兩國親善上、甚だ遺憾とされて居る矢先に、またまた滿露東部國境に於て、ソビエツト側軍憲の不法越境事件が勃發した。それは、九月二十七日の夕刻に吉林省廣山縣半截河の上空に、ソビエツト軍用機が不法越境飛來し、同地一帯を偵察した上、ソビエツト側へ飛び去つたこと、第二は九月二十五日午後三時頃、東寧北方地區にソビエツトのケー・ペー・ウー二名が越境侵入して來て、日本人に小銃の一齊射撃を浴せたこと、第三には、同日午後三時頃、同地附近の小川で、釣りをして居た滿洲國籍鮮人二名が、ケー・ペー・ウー

のためにソビエツト聯邦領に拉致されて目下監禁中であること等の不法行爲を飽くなく、くり返して居るのである。この出先ソビエツト軍の行動が、今後、どんな災禍を齎らさぬとも限らぬのである。

極東の情勢に於ける一番大きな危険は、此點に潜んで居ると私は考へるのである。

拙め、新しい動きを！

パンフレットの共同購入に就て

社會萬般の新しい動きは、新聞のニュースでは判りますが、御承知の通り新聞の報道は、斷片的で簡略に失し、事相の全貌を掴み難い憾みがあります。この不満を充ててくれるものは單行本ですが、單行本の價が高く、且つ記述が詳細煩多に流れ、一寸購つてみる氣にならないのが普通であります。

現代出版界の先端を行くパンフレットの類は、新聞と雑誌、乃至は雑誌と圖書との間を行く性質のもので記述は簡潔明快で解りが早く、價は十錢二十錢の廉價であります。知識慾に燃え盛る忙がしい人々の必讀すべき出版物であります。

本社はパンフレットの専門出版社として、一流の地歩を占め、政治・經濟・外交・社會・兵事・趣味にわたり將來各種各様のもを出版する計劃でありますから、何卒御愛顧の程を願ひ上げます。既に左記の書目を發行致して居りますから、御愛讀の程を願ひ上げます。十部以上御注文の方には割引の特典があります。御申越次第規定書進呈致します。(農藝社)

株式調査會編

株屋のインチキ實例

株屋のからくり

一部二十錢 送料二錢

世にインチキは多いが、凡そ株屋のインチキ程、徹底したものはない、日本橋の兜町附近にある新場橋警察署の例の立札をみても、如何に不良株屋共が跋扈してゐるかが判る

一攫千金の夢を見て、誰も株へ手を出したがるものである、が勿論なか／＼思ひ通りに儲かるものではない。それが思惑はずれの損なれば致し方もない次第だが、不良株屋のインチキに引かゝつて、元も子も玉無しにしてしまつたとなると之は甚だ愚かな話して、其の爲破滅までしたとなると、それこそ笑話どころの問題ではない、本書は此等株屋のインチキを素破抜いて、餘すところがなく、株へ手を出す人の良き辯護士でもある。

不良株屋を警戒せよ

菅野秀雄著

一九三五、六年の危機迫る

明年の軍縮會議

一部十五錢 送料二錢

愈々ロンドンに於て豫備交渉は開かれた各國全權は秘策を胸に參集しつつある英國の老獪、米國の不遜、國民は斷固として會議の成行を看視しなければならない

比率五、五、三では我國防は危険である。今度こそは此の屈辱的比率を覆さなければならぬ。其の爲には當然押つけるであらう 英、米の横車を押返す覺悟が必要である。日本の正しき主張を貫徹せしむる爲には會議の決裂も保し難き状態である。否！ 日本にして屈辱的讓歩を敢てせざる限り會議の決裂するであらう事は最早不可避的である。

全國民よ起て！

（錢二料送）錢十部一各價定

松波治郎著 秘史あゝ奉天開城	松波治郎著 秘錄日本海大海戰	野崎信夫述 秋播草花 （特價二十錢）	野崎信夫述 春播野菜	保險調査會編 保險のからくり （特價二十錢）	山本實著 世界ギヤング行狀記	菅野秀雄著 明年の軍縮會議 （特價十五錢）	耕堂學人著 政黨政治の再建	山本實著 國際スパイ戰秘話
----------------	----------------	-----------------------	------------	---------------------------	----------------	--------------------------	---------------	---------------

京東替振 區野中市京東
番九六〇九四 社 藝 農 六一三町和大

昭和九年十月廿二日印刷納本
昭和九年十月廿五日發行

日ソ開戦か？

〔定價金拾錢〕

不許製

版權有

著者 松波治郎

東京市中野區大和町三一六番地

發行者 野崎信夫

東京市小石川區表町八十二番地

印刷所 勇昌堂中橋印刷所

發行所

東京市中野區大和町三一六番
振替東京四九〇六九番

農藝社

電話四谷(35)三二〇五番

終

行發社藝農京東